

## 芥川龍之介の童話「魔術」

### ——ミスラ君はなぜ魔術を教えたか——

山脇佳奈

#### はじめに

芥川が『赤い鳥』に執筆した童話第三作「魔術」（大正九年）は、決して研究の盛んな作品とはいえない。井上諭一は「周知の通り、この作品は谷崎潤一郎の『ハツサン・カンの妖術』を下敷きにした短いものであって、しかも、一見平凡な寓話にしかみえない。その評価がかつて高まらなかったのも当然のように思われる」<sup>（注1）</sup>だとか、そのデータとして「早くに吉田精一が『童話』と一語で片付けた」<sup>（注2）</sup>とかと述べている。井上の指摘通りこれまでの「魔術」研究は、原典である谷崎作品との比較が主であった。

また「魔術」を芥川作品の流れに置いて「特に代表作『蜘蛛の糸』から、『魔術』に次いで執筆された『杜子春』において、この『魔術』に、『過度的』かつ『付属的』な価値を見出す」<sup>（注3）</sup>論が多かった。例としては、「主題は『蜘蛛の糸』のエゴイズム批判を継いでいる」<sup>（注4）</sup>とする三好行雄や、芥川の持つ芸術至上主義の終息の一部として「『蜘蛛の糸』

から『魔術』に到る傾斜は、やがて、『杜子春』へ到るものかも知れない」<sup>（注5）</sup>という越智良二などが挙げられよう。これらの意見に見えるように、「魔術」は芥川童話の名作と見なされる「蜘蛛の糸」と「杜子春」の橋渡しの存在に位置づけられてしまい、「魔術」自体が論じられる機会はこれまであまりなかった。そのため、「魔術」一作のみ取り上げる行為自体に、すでに意義があると私は思う。そこで本論においては、未だ数少ない「魔術」単独の論を展開したい。

その「魔術」の概略は、魔術を見たいと訪ねてきた主人公の「私」に、魔術師のミスラ君が約束通りさまざまな魔術を見せるといった流れになっている。けれども、ミスラ君と「私」の接見は、魔術鑑賞だけに留まらなかった。「私」の要望は魔術鑑賞に限定されていたのにもかかわらず、ミスラ君は「私」に魔術を伝授しようとする。結果「私」の物欲があらわになって、「私」は魔術を操るにふさわしくない人間であることが暴露されてしまう。いわば予定外の出来事のために「私」は自分の恥をさらしてしまうことになったのである。手紙一通の存在によって成立できている物語にあって、この逸脱は不自然ともいえる。

なぜミスラ君は、こうした当初の予定以外の行動にまで及んだのであろうか。今回は、この予定外のミスラ君の行動理由を検討することを第一義にして、分析を進めていきたい。

そもそも、インド人であるミスラ君と日本人の「私」はどのようにして出会ったのであろうか。本文には「私は丁度一月ばかり以前から、或友人の紹介でミスラ君と交際してゐました」とある。ミスラ君と「私」の間には共通の友人が介在しており、それぞれで知り合ったというわけではない。また、出会ってまだ「一月」足らずで交流も浅く、特に親密な関係でもないと思受けられる。

このように特別親しいとも思われない「私」から、ミスラ君は手紙を受け取る。その内容は、当然魔術を見せてくれという希望の手紙であつた。それに対してミスラ君がどう返事をしたのか特に本文への記述もないが、結局魔術を見せている以上、ミスラ君はともかくにも「私」の要望を受け入れたのだと推測される。ただ、「私」の要望に対してミスラ君がどのように感じたかという問題は、要望の受理、不受理とは別問題であり、そこからミスラ君の「私」に対する感情の一端を知ることができるだろうと考える。

以上のように魔術を見たいとミスラ君宅までやってきた「私」になぜミスラ君は魔術を見せるだけに留まらず伝授したのかという疑問解決が、私にとってミスラ君分析における最重要課題なのである。ただそれを追究するには、まずミスラ君がいかなる人物で、「私」にどのような感情を持っているためにこのような行為に及んだのかとい

う、行為の要因が潜んでいるであろうミスラ君の内面から確認しなければならぬ。さらに、そもそも特別親しくない「私」からの要望をミスラ君がどう感じたかを解明することが、魔術師としてのミスラ君が「私」に抱く感情の基礎となるだろうと思われるので、「一」ではまずこの点を考察していく。

## 一 ミスラ君の魔術師としての姿勢

この「一」では、魔術を見せて欲しいと望んできた「私」への感情に影響するだろうと考えるため、人物分析の照準をミスラ君という一人格のうち、特に魔術師としての姿勢に合わせる。ミスラ君は、どんな主義を持った魔術師なのだろうか。

まず本文を見ると、ミスラ君が魔術師であるのは、「魔術」に描かれる日本においてはよく知られていると読み取れる。物語では「マテイラム・ミスラ君と言へば、もう皆さんの中にも、御存知の方が少ないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計つてゐるカルカッタ生れの愛国者で、同時に又ハッサン・カンといふ名高い婆羅門の秘法を学んだ、年の若い魔術の大家なのです」というようにミスラ君の経歴が紹介されている。ただし、「私」はミスラ君と「政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあつても、肝腎の魔術を使ふ時には、まだ一度も居合せたことが」ないので、物語冒頭にあるように手紙を出して魔術の披露をミスラ君に請う運びとなつた。

先の紹介にある通り、物語中の世界では「御存知の方」も少なくないミスラ君の魔術であるが、その実態を詳細に知っている人物は、その著名ぶりとは反対に本文中には誰も出てこない。「私」自身、魔術の実態は周りから伝え聞いたに過ぎなかった。ミスラ君から魔術を披露されたときにも「いや、兼ね兼ね評判はうかがつてゐました」という感想を述べているだけで、ミスラ君は人々の口に「評判」としては上つても、実態はあまり知られていない。その証拠に、「私」が仕入れていた魔術に対する情報を「確あなたの御使ひになる精霊は、デンとかいふ名前でしたね」と確認すると、ミスラ君は「デンなどといふ精霊があると思つたのは、もう何百年も昔のことです」と否定している。それほど人々の「評判」は不確かな情報なのである。それには時間の経過や、話に尾ひれがついて事実が誇張されたのが原因とも想像できるだろうが、その他の原因として、ミスラ君自身の魔術に対する姿勢が挙げられると思われる。つまり、魔術とはこのようなものであると断定することができないほど、ミスラ君が魔術をみだりに他人へ見せていないのではないかと思われるのである。

ここで、「私」がミスラ君を訪ねる原因となつた箇所をもう一度確認してみると、「私」とミスラ君との間に親密さがいないことは先述したけれども、それでも「一月」の付き合いはあることが分かる。したがって「いろいろ議論」をして交流を持った「一月」の間にも、「私」が魔術を見る機会があったのだ。現に「一月」後、頼めばミスラ君は魔術を見せてくれている。けれども「私」は「一月」の間は、魔術が

披露される瞬間に「居合せ」るのを待っているだけであつた。それでこのとき初めて「私」が魔術を見る機会をえているということは、裏返せば、ミスラ君が進んで自身の魔術を他人に見せびらかす人物ではないということではないか。要望がない限りは、自分が魔術師であることをさらに教えないのがミスラ君の信条なのであると推測される。したがって、例えば魔術にはデンという精霊が必要だといった間違った情報が世間に流布しても、自分からは訂正しない。そこから魔術を使える者のみを知る領域を他人には見せないかたくなに加えて、自分自身もその領域から出ない閉鎖的なミスラ君の姿勢が窺える。

それでも、ただの人と交わることをやめてはいない。それは、「私」とそれまで「政治経済の問題などはいろいろ議論」していたように、魔術とは別次元の現実的な付き合いであり、ミスラ君が守っている魔術の領域が侵されない種類の交流であつたためであろう。ゆえにミスラ君にとつて「私」は「政治経済の問題などはいろいろ議論」できる相手ではあるけれども、それ以上の心を通わせる必要のない人物なのだと思われる。しかしそれにもかかわらず、そんな部外者の相手であるはずの「私」に、自分が大切に守っている魔術をミスラ君は見せようとしているのだから妙である。ミスラ君はどうしてあえて主義を曲げてまで、「私」に魔術を披露することにしたのだろうか。

この「一」で分かつたことは、「私」が自ら頼まなければミスラ君の魔術を鑑賞できないことから、ミスラ君が魔術師として非常に閉鎖的な姿勢を取っているということである。したがって、魔術伝授とこ

ろか魔術披露すら本来ならミスラ君の望むところではないといえるだろう。ゆえに「私」はミスラ君の気が進まないであろうことを頼んでいたことがここで判明する。そしてだからこそ、魔術師としてのミスラ君が「私」を好ましくは思っていないであろうことが、まずは疑えるのである。

## 二 ミスラ君の「私」に対する価値判断

「一」で、ミスラ君は「私」を好ましく思っていないと考えられると短く述べた。そこでこの「二」では、「私」を好いてはいないミスラ君の気持ちが読み取れる箇所を引用し、具体的にその感情の内容を示していきたい。

いよいよ魔術を「私」に披露するといふとき、ミスラ君の見せた表情には「自分も葉巻へ火をつけると、にやにや笑ひながら、匂の好い煙を吐いて」という表現があてられている。これは、「私」が仕入れた魔術の情報を否定する直前に見せたミスラ君の表情である。「にやにや」には「ひとり悦に入ったり、意味ありげに、また、ばかにしたように、声を出さず薄笑いするさま。」<sup>(注五)</sup> というあまりよくない意味がある。この意味をミスラ君の笑いに当てはめた場合、どのように解釈できるであろうか。

ミスラ君は、「私」の「あなたの御使ひになる精霊は」という言葉に対して「チンなどといふ精霊があると思つたのは、もう何百年も昔

のことです。アラビヤ夜話の時代のことでも言ひませうか」とその情報のあまりに古い、時代遅れの認識であることを教えている。この直前に「にやにや」笑う。この笑いの引き金になったのが、「私」の魔術に対する知識のなさを如実に示した、先の精霊云々の言葉であった。それまでは何ら表情は描写されていないから、原因は「私」の言葉にあると見てよからう。そうして笑ってからその「私」の言葉を否定する。加えて正しい情報を与える。ミスラ君にとって「私」の認識ぶりは悦に入つて面白がるような、馬鹿にしたくなるような、薄っぺらい情報だったのである。したがって、この魔術に関する情報交換の会話の段階で、ミスラ君は「私」を魔術に関しては無知な者として判断しきつてしまったといえるのである。

では、その判断はどこから始まっていたのだろうか。そもそもミスラ君は魔術を公にすることは望んでいない。よって、「私」から手紙を受け取った時点で断るのが、一番面倒がなくてよかったはずである。しかし、ミスラ君はそれをしていない。それはどうしてだろうか。

ふたりがミスラ君の家で最初に顔を合わせたとき、ミスラ君は「今晩は、雨が降るのによく御出ででした」と労いの言葉をかけている。しかし「私」が返した言葉は「いや、あなたの魔術さへ拝見出来れば、兩位は何ともありません」という魔術鑑賞の希望が先行した言葉だった。魔術が見られなければ、我慢できない雨の降りであつたとも取れそうな言葉である。

そんな魔術という未知の世界に夢中の「私」とは対照的に、魔術が

明るみに出ることを望んでいないミスラ君は、「永年印度の独立を計つてゐるカルカッタ生れの愛国者」である。加えてインドを植民地化したイギリスから逃れて、他の侵略を受けず単独で一国として存在することを夢に見ている青年である。そしてミスラ君の体得している魔術は、一国として立つべきインド独自の「婆羅門の秘法」なのである。こうした状況を踏まえると、自国で育まれた秘法をミスラ君は愛国者ゆえに保護しようとしているのだとは考えられまいか。独立すべき存在に部外者が首を突っ込もうとしているこの場面の事態は、愛国者ミスラ君にしてみれば、故郷が汚されるに等しいものであろう。しかも、「私」は魔術たるものをしっかりと理解せずに、そのくせ顔を合わせてからというものの魔術を見ることしか頭にない。それは正確に言えば、顔を合せてからといわずミスラ君が手紙を受け取ったときから続いている。ミスラ君の立場から眺めれば、紙切れたった一枚で秘法を見せて欲しいと望んできた「私」は、ミスラ君の故郷インドに土足で入り込んだイギリスのような存在なのだとはいえないか。

ミスラ君が「私」を無礼と感じる要素は初めからあつたのだ。よつて判断は、ミスラ君が手紙を落手したときから始まつていたのでないか。そして「私」がいよいよ我が国の秘法にかかわるにふさわしくない人物であると分かつてきたからこそ、ミスラ君は「にやにや」と笑つたのであろう。

こうして、この「二」では「私」と魔術について会話している際のミスラ君の「にやにや」という表情を手がかりに、ミスラ君の「私」

に対する感情を読み取つた。ミスラ君は、魔術に関して無知でそのくせずうずうしく披露を望んできた「私」が、そもそも魔術に安易に興味を持つたために気に入らないのだと思われる。ただ手紙を受け取つた時点では、まだミスラ君は「私」の無知を知らないから、「私」が魔術にかかわるにふさわしいか判断する意味で、「私」の要求を飲んだのではないだろうか。

また物語中のミスラ君の描かれ方と、魔術が婆羅門独自の秘法で特殊性のあるものという事情から、ミスラ君自身の魔術への考え方を明らかにした。ミスラ君が、魔術披露を好まないことは、「一」において触れたが、それはミスラ君の愛国者としての立場が原因であらうと考えられる。ミスラ君は、単に好悪のもとに魔術を秘すわけではなく、インド人としての使命感を持つて魔術を保護するためにみだりに見せないのではなからうか。それは魔術師としてのミスラ君の姿勢を示しており、これ以後展開されていく披露について重要な要因となるものであろう。

そもそも魔術を披露することは、ミスラ君が「私」にもともと承諾していたことであるので、仕方ない。ただし、伝授まではしなくてよいのではないかと考えることも可能である。しかし披露も断る道はあるのだから、何もミスラ君が主義を曲げる必要もない。そこをミスラ君は、披露のみならず伝授まで「では教へて上げませう」と了承した。むしろここから、断らずに「私」を判断し披露や伝授の道を選択するしかなかった、抜き差しならないミスラ君の事情を考えなければ

ならないのではない。さらにここで「私」が魔術を学びたいと思っ  
たきっかけについて、気にかかる事実がある。

というのも物語中、魔術と呼ばれる催眠術を行使したミスラ君に  
よって、香る花柄のテーブル掛け、ひとりでに回るランプ、空飛ぶ書  
箱といった三種の変事を目撃し、一度催眠状態ではなくなった「私」  
は、実際に魔術を伝授してもらえることになった。これは「私」が『私  
の魔術などというものは、あなたでも使はうと思へば使へるのです』  
といふ言葉を思ひ出し、て、ミスラ君に「ところで私のやうな人間に  
も、使つて使へないことのないと言ふのは、御冗談ではないのですか」  
と話を振つたためである。でなければ、「では教へて上げませう」と  
ミスラ君が申し出ることもなかった。つまりミスラ君が先述の三度の  
魔術を終えて、なおも催眠術を「私」に施すこともなかったわけであ  
る。けれどもさらに元を正せば、魔術は誰にでも使えるものだという  
情報を与えたのは、ミスラ君本人である。この情報がなければ、私が  
食いついてくることもなかった。したがって、伝授すなわちミスラ君  
による「私」への催眠術が必要になつた原因を作り出したのは、ミス  
ラ君本人となる。ミスラ君はなぜ自ら自分の手を煩わせるような発言  
をしたのだろうか。これら二点の疑問は、そもそもこの論全体の最た  
る疑問として提示していた、当初魔術を見せる予定だけだったはずの  
ミスラ君が、なぜそれ以上の行為に及んだのかという疑問に通ずる問  
題であるといえよう。ミスラ君がこうした発言をしなければ、予定外  
の行為に及ぶこともなかったと考えられるためである。ゆえに、まず

ミスラ君の発言の真意を探っていけば、自然と第一の疑問を解決する  
手がかりをえることができるように思われる。

「二」までに、ミスラ君の人物分析について糸口となるミスラ君の  
「私」への感情は判明しているので、「三」よりは「私」とのやり取り  
のなから、ミスラ君が魔術関連の事項は隠したいとする主義を曲げ  
て、「私」とかわりを持ち続け魔術の習得が可能なことを教えたうえ、  
魔術披露、伝授へと至っていく理由を探っていきたい。

### 三 ダッシュ記号とミスラ君の魔術伝授

この「三」では「二」で放置した、ミスラ君本人から魔術伝授の原  
因となるような発言がなされた謎を解明する。そしてミスラ君の人物  
分析において最大の疑問であった、予定外の魔術伝授へと至る理由を  
検討していきたい。

ここで、まず「私」が魔術を学びたいと考える原因となつたミスラ  
君の会話文をもう一度引用しておきたい。

「ジンなどといふ精霊があると思つたのは、もう何百年も昔の  
ことです。アラビヤ夜話の時代のことでも言ひませうか。私  
がハツサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使はうと思  
へば使へますよ。高が進歩した催眠術に過ぎないのですから。  
——御覧なさい。この手を唯、かうしきへすれば好いのです。」

ミスラ君は、魔術について昔の知識しか持っていなかった「私」に、



こうして新しい情報を与える。その無知な「私」の認識はそもそもどういうものであったのだろうか。この会話文に先行して、「私」は次のように述べている。

「確あなたの御使ひになる精霊は、デンとかいふ名前でしたな。するとこれから私が拝見する魔術と言ふのも、そのデンの力を借りてなさるのですか。」

「私」の魔術に対する認識は、右の引用文のように魔術師はデンという精霊を用いて魔術を行使用するといった程度であった。だが、ミスラ君はその認識は古く、「魔術」における現代の魔術にはふさわしくないと指摘するのである。それから、「私」が「デンの力を借りてなさるのですか」と質問するので、ミスラ君は「この手を唯、かうしさへすれば好いのです」といつて魔術には特別な道具は必要ない実状を示す。つまり、「私」の言葉はデンという精霊が未だ存在するという思い込みと、魔術にはデンが利用されるのかという疑問に二分することができるのである。そのため後に続くミスラ君の言葉は、この思い込みと疑問の二点を解決する内容であればいいのである。

そうした注目点からミスラ君の会話文を眺めると、不要な言葉が混じっているのに気づく。それは、「私がハツサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使はうと思へば使えますよ。高が進歩した催眠術に過ぎないのですから」という二文である。こは「二」の終盤にて指摘した、ミスラ君の面倒を増やす原因となった部分でもある。この二文は、「私」が思い描いたデンの存在に関して言及しているわけでは

ないし、また魔術の方法論を述べているわけでもない。魔術がその実催眠術で誰にでも容易に会得できる術である秘密をばらさなくても、「私」の疑問は解消できていたのである。だから二文は不要なのである。それなのに、なぜこの二文はあるのだろうか。

しかし、ここでその意義を考えるため二文を注視していると、下に記号があることに気づく。「――御覧なさい。」にある「――」である。読解に慎重をきすべき文章の付近に、文字ではなく目立つ記号として記されている点は無視できない。ゆえに二文について考える際には、直後にあるこのダッシュ記号にも注意がはらわれて然るべきであろう。この記号は、何を意味しているのだろうか。『新詳説国語便覧』<sup>〔註〕</sup>においては「①言い換えて『すなわち』の意 説明する場合。／②気分の転換や余情などを示す場合。」とある。この定義を踏まえつつ、また直前に句点があり、文章が終了していることに注意して考えたい。

物語の流れを見ると、ダッシュ記号以前は魔術そのものの話、以後は魔術を披露する場面と内容に変化がある。ここがもし「言い換えて」の意であれば、ダッシュ記号の前後が同様の内容でなければならぬ。つまりこのダッシュ記号は②の内でも「気分の転換」が最もふさわしいように思われるのである。それは「魔術」におけるその他のダッシュ記号の使用例を見ればより判然とする。「魔術」には「――御覧なさい。」の他に二箇所「――」の記されている箇所が存在する。

- ① ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にデエブルが一つ、壁側に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——外には唯我々の腰をかける、椅子が並んであるだけです。

- ② 「使へますとも。誰にでも造作なく使へます。唯——」と言ひかけてミスラ君は、

①の場面は、「私」がミスラ君宅に到着し部屋に通された際の、その部屋の様子が描写されている箇所になる。また②の場面は、自分にも魔術が使えるのかと尋ねる「私」へのミスラ君の答えである。

まず①においては、部屋にあるものが順番に列挙されていき、一度「窓の前」の「机」で止ってダッシュ記号を挟んでいる。それから「腰をかける、椅子」もあることが遅れて示される。ダッシュ記号を挟んで並ぶ内容は、どちらも室内の家具についてであり、「窓の前」の「机」で、室内の描写が終わっているわけではない。句点はあくまでも椅子を描写してからついているのであり、ダッシュ記号には部屋の様子を継続させる機能がある。

続いて②の場面である。この場合は、括弧で括られており結末がついているようにも思えるが、その直後にある「と言ひかけて」という表現が見逃せない。つまり、カギ括弧の内容はまだ終了していないのである。にもかかわらず間にダッシュ記号が挟まれているのは、「唯」の後に続くべきミスラ君の思いが、ダッシュ記号には託されているためだと考えることができる。だいたいこのミスラ君の会話文末には句点がない。作者である芥川によって、他の会話文末には句点がもれ

なく打たれていることを考慮に入れば、ますますいかにこのミスラ君の会話文が途切れた形の、終了されていない言葉であるかが分かるであろう。そしてまた、だからこそダッシュ記号も直前の「唯」という言葉の影響を受け、「唯」が持つ内容を持続させる役割を負っているということが出来る。

以上で、このふたつのダッシュ記号と「——御覧なさい。」のダッシュ記号が物語にもたらしている効果、ダッシュ記号そのものの持つ意味が決して同じではないことは、証明できたと思われる。先のふたつのダッシュ記号は言葉の内容を引き伸ばす役目を担い、「御覧なさい。」のダッシュ記号は直前の言葉から「御覧なさい。」を引き離す役目、魔術が催眠術であるという話題から魔術の方法論への意識転換の役目を担っているといえるのである。

それでは、なぜわざわざ意識の転換が必要であったのか。それまでの話題を一度終わらせ、次に進んでいる跡をくつきりと残しているのか。それはそれまでの内容が、捨てるようなところでもないだろうか。まあほど、ミスラ君にとって重要な話題だったからではないだろうか。つまり、「私」の無知な二項目に分けられる質問に対して答えることよりも、「私がハツサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思へば使へますよ。高が進歩した催眠術に過ぎないのですから」と質問には関係のない話題を「私」に提供することの方が、ミスラ君には重要だったのである。したがって、魔術の伝授はミスラ君の望むところであり、「私」が手紙で要望した内容を逸脱することが、むしろ



ミスラ君の目的だったのだと思われる。そのため、魔術に変な思い込みと疑問を持った「私」への返答としては不自然な二文は、決して不要ではなかったといえよう。「私」を魔術伝授へと導くためには、必須の二文であったのだ。

これで、第一の疑問であった、当初魔術を見せる予定だけだったはずのミスラ君が、なぜそれ以上の行為に及んだのかという問題は一部解明できたと思われる。魔術伝授こそ主眼としているミスラ君は「あなたでも使おうと思へば使えますよ」と「私」に話を振って「私」が食いついてくるのを待った。けれども、ここでは食いついてこなかったのでダッシュ記号となつて表されているように気分を改めて、ひとまず魔術を披露することに決めたのではないだろうか。

インド人の聖域に入り込んだイギリス人のように、インドにおいて育まれた魔術の世界に、「私」は紙切れ一枚で踏み込んでこうとした。だが、手紙には「魔術を使つて見せてくれ」と書かれてはいても、魔術を伝授してくれとは書いていなかったはずである。私は「二」において、ミスラ君が紙切れ一枚で易々と魔術を鑑賞しようとしている無礼な「私」の価値を知る意味で、手紙の内容を承諾したと一度記した。「私」への判断は手紙の落手から会話のなかにまで及ぶとの事柄も述べた。しかし、ミスラ君の真の目的が魔術伝授にあつたと判明した「三」にあつては、「私」の価値を定めるに至るまでのミスラ君の表情も、すでに決定していた事項に対する最終確認の意味に変化する。ミスラ君の「私」に対する好ましくない感情は、手紙を受け取る、自

宅に「私」を招く、「私」と会話を交わすといった段階に従つて徐々に増したわけではなく、手紙を落手したときすでにあらかじめ固まつていたのではないか。それに加えて、紙切れ一枚で領域侵犯をしようとしている不屈き者の「私」が、魔術に関して無知であるさまを目撃し、ミスラ君は「にやにや」と笑つて改めて「私」の無価値を痛感したのではないか。したがつて、ミスラ君の「にやにや」とした微笑みは「私」に対する価値判断中の現象ではなく、結果がすでに出たあとの表情といえよう。

#### 四 ミスラ君はなぜ魔術を教えたか

「三」にて、むしろ魔術披露に関する手紙の内容から伝授へと脱線したかったミスラ君の姿を明らかにした。では、ミスラ君の真の目的である魔術伝授の行動にはどういった意味が隠されているのだろうか。前章までの内容を踏まえ、考察を進めていく。まず魔術伝授に今一度話が及んだ場面を引用する。

「使へますとも。誰にでも造作なく使へます。唯——」と言ひかけてミスラ君は、ちつと私の顔を眺めながら、いつになく真面目な口調になつて、

「唯、慾のある人間には使へません。ハツサン・カンの魔術を習はうと思つたら、まづ慾を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」(中略)

「魔術さへ教へて頂ければ。」(中略)

「では教へて上げませう。」(中略)

ミスラ君は、誰にでも魔術が簡単に使えることを再度認め、けれども言葉の途中で切った。そして改めて「真面目な口調になつて」、魔術が「慾のある人間には使へ」ない内情を告知する。それまで、「私」が一度目の誘いに乗つてこなかったため披露していた三種の魔術においては、ミスラ君は始終「にやにや笑ひ」をして私を馬鹿にしていた。つまり「真面目な口調」は、「いつになく」と評されるにふさわしく、今まで「微笑を含んだ声で」喋っていたミスラ君には珍しい声色なのである。だが、ミスラ君はどうしてもいつもの自分の態度らしからぬ硬い態度を取らずにはいらなかったのだ。それはいよいよ自分の計画を実行するときがやつてきたからであろう。魔術の実情をあらわにしたくないミスラ君には、「私」に不本意ながらも魔術を伝授するという真の目的があつた。魔術を秘めておきたいと考えているミスラ君からしてみれば、できればやりたくない。やらないですむならその方がいい。けれども、「私」が不躰にも魔術に興味を持つてしまったから仕方ない。いよいよ迫つてきた偽りの魔術伝授の瞬間に思わず、それこそを達成したいと考えているミスラ君は「真面目な」と「私」に受け取られるような硬い口調にならざるをえなかったのであろう。

そして、欲のある人間に魔術は使えないという決まりを教えておいて、ミスラ君はいよいよ「私」を夢のなかに連れ込む呪文を唱える。

真剣だから「私」が「御礼」をいおうとも「そんなことに頓着する」暇はない。とにかく呪文を唱えて、見事に「私」を夢の世界に入り込ませることに成功した。このうゑミスラ君に残されている仕事は、「私」が夢のなかで欲を出さないという掟を破るように、「私」を導くことである。

私は勝ち誇つた声を挙げながら、まつ蒼になつた相手の眼の前へ、引き当てた札を出して見せました。すると不思議にもその骨牌の王様が(中略)にやりと気味の悪い微笑を浮かべて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御婦リニナルサウダカラ、寝床ノ支度ハシナクテモ好イヨ。」と、聞き覚えのある声で言ふのです。(中略)

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌の王様のやうな微笑を浮かべてゐるミスラ君と、向ひ合つて坐つてゐたのです。

右の引用中、骨牌の王様の微笑は「にやり」と表現されるが、これは催眠術で夢を操作するのがミスラ君であり、夢の内でも夢を終わらせるのが王様であるために、王様すなわちミスラ君と考えてよいだろう。そのため、王様の視点もミスラ君の視点、現実世界でのミスラ君の微笑も「まるであの骨牌の王様のやうな微笑」と例えられている通りと解釈できる。

こうして「私」は、掟を守れずに夢から帰つてきた。しかし、先ほども指摘したように、夢の世界を作り上げているのはミスラ君である

から、「私」はミスラ君の迷惑によつて故意に綻を破らされたと考えることができよう。つまり「私」が欲を出し、夢を終わらせることができるようにミスラ君に体よく誘導されたのである。

また、引用部にある「御客様ハ御帰りニナルサウダカラ」より、ミスラ君には「私」の意志を無視した独自の考えのあることが分かる。「私」は帰るなど一言もいってはいない。けれども無理やり帰ることになっている。これはもともとミスラ君の考えに、「私」を自宅から追い出すという項目があつたためであらう。

したがつて、ミスラ君が魔術伝授を重んじていた真意はこれで明らかになつたと思われる。つまりミスラ君は、紙切れ一枚で魔術の聖域に入り込んできた「私」を追い出すために、「私」にショックを与えて、二度と魔術に興味を持たぬように仕向けるのに夢の世界を利用したのではないだろうか。こうした事情があつたからこそ、「私」からの手紙の内容も受け入れ、自宅にも招き、魔術披露も行ったのだ。

こうして目的を無事に達成したミスラ君は、実に余裕に溢れている。「私」を催眠術にかけていた際の「真面目」さはもはやどこにもなく、「まるであの骨牌の王様のやうな微笑」を「にやり」と浮かべているだけである。それは、「私」と魔術談義をしていたときに浮かべた「にやにや」笑いを連想させる。「私」を魔術に無知な者として嘲笑する微笑みである。

だがその一方、ミスラ君は物語の最後「気の毒さうな眼つきをしなから、緑へ赤く花模様を織り出したテエブル掛の上に肘をついて、静

にかう私をたしなめました」と本文にあるように、「私」を「気の毒」と思いやるやうな目つきもしている。ミスラ君にとつて嘲りの対象ではない。「私」に、ミスラ君が向けたこの「気の毒さうな眼つき」という視線は何を意味するのか。

「私」の精神を完膚なきまでに痛めつけ、二度と魔術にかかわらないようにすることが総合的な目標であつたミスラ君が、「私」を「気の毒」がるとするのは考え難い。「私」が魔術習得に失敗することを望んでいたのは、他ならぬミスラ君だからである。だが、その視線は思わず目を留めてしまうやうな、何か特徴的な色を帯びていたのである。ミスラ君も「私」に対して何も思っていないわけではない。軽々しく魔術を見ようとする態度が気に入らないし、魔術の知識のなさも「にやにや」と笑えるほど、嘲笑に値する。つまりミスラ君が「私」に持っている感情は、総じて嫌悪感といえる。そしてそういった感情が基盤にあるからこそ、その対象である「私」を見る目つきにも特筆されるだけの変化が表れているのだらう。ゆえに、この視線はミスラ君が「私」を「気の毒」がつているというよりも、自らが無価値と断定した「私」を見たがために特徴的になつた視線を、「私」が勝手に「気の毒」がつてくれたと誤解しただけ、と考えるのが自然であらう。

これらのことによりミスラ君は、魔術師としてとにかく自分の領域を強固に守り、関係のないものは愛国心ゆえに切り捨てて。さらに、安易にかかわりを持つてきた人物に関しては容赦ない、閉鎖的な人物であるということができると思われる。

このように「四」では、伝授が告げられる場面と、催眠術が解かれ結末へと至っていく場面を中心に論を展開した。「三」で明らかにしたように、魔術伝授がミスラ君の目的とはいっても、夢を操作し「私」に失敗するように仕向けたのもミスラ君である。ゆえに、魔術伝授で氣を引き「私」を追いつことがミスラ君にとつての最終目標であり、そこから浮き出てくるミスラ君の人物像は、閉鎖的で冷たいものと結論づけることができる。

## おわりに

以上、魔術師ミスラ君が、なぜ魔術伝授という予定外の行動を取ったのかという問題を中心に据え、その問題に至るまでのミスラ君が持つ「私」への感情、魔術師としての姿勢を明らかにしながら、ミスラ君の人物像解明を行った。その経過をまとめてみたい。

まず、ミスラ君が始終「私」に見せている「にやにや笑ひ」と、同時に宣告される「私」の魔術知識の誤りから、ミスラ君が「私」を好ましく思っていないことを明らかにした。また、それまで「一月」とはいえ交流を持っている割に「私」は不思議とミスラ君の魔術には出くわしていないため、ミスラ君は基本的には魔術を他人に見せびらかすものではないと考えているのではないかと推測された。それは、愛国者としてのミスラ君のあり方にも重なるといえる。イギリスからの解放を望み、独立国家として他の干渉を受けたくないと感じているは

ずのミスラ君は、母国インドで習得した魔術を大切に保護し、露見しないよう注意していると思われる。

しかし、「私」との接見に限ってその主義を曲げて、ミスラ君が魔術を部外者であるはずの「私」に披露したのは、そもそも「――御覧なさい。」のダッシュ記号に込められている意識の転換を迫られたからに他ならない。つまりミスラ君は「私」の手紙を受け取りながらも、その他に目的を持っているのである。それが予定外の魔術伝授であった。一度この話を「私」に振った際、「私」は氣に留める風もなかった魔術が見たいと切望したので、とりあえずミスラ君は三種類の魔術を披露した。このとき「私」を催眠状態に陥らせておくのが、ミスラ君の魔術の真相である。そして二度目に魔術伝授の話をしたときには、「私」は見事にミスラ君の思惑に乗ってきた。ミスラ君は一度目のときのように簡単に内容に触れるだけでなく、欲を捨てればよい、と具体的な方法まで指し示す。そして、「私」には「真面目」と感じられる表情で魔術を施す。それまでの「にやにや」した表情とは明らかに違ふ点で、やはりミスラ君にとつて、「私」への魔術伝授こそが目的だったことが分かる。

では、なぜ魔術伝授がミスラ君の目的であったのか。それは夢から私を目覚めさせる呪文の一部であった、「御客様ハ御帰リニナルサウダカラ」という言葉から判然としてこよう。「私」はこのとき未だ夢のなかにいるはずで、帰るなどとは一言もいっていない。「私」が帰ると決めたのはミスラ君である。つまりミスラ君の独断で「私」はミ

スラ君の家から追い出されるはめになったわけである。私は、これがミスラ君の本音であると考ええる。ミスラ君は「私」を夢のなかに入り込ませて、欲のあることを実感させ、自分が魔術師にふさわしくないことを「私」に思い知らせ、恥をかかせ、神聖なインド独自の魔術にもう二度と「私」が興味を抱かないように画策したのである。ミスラ君の取ったこのような行動は、「私」の手紙には記されていない予定外の行動であると同時に、ミスラ君にとっては手紙を受け取ったときから決めていた予定の行動だったといえる。

そしてこれらの事柄を根底にすれば、ミスラ君が「私」を「気の毒」がる目つきも決して文字通りの感情が元とはいえない。ミスラ君が「私」の魔術師として才能のなさを嘲笑う感情が、視線を特別なものにしたため、それを受け止める「私」は自分が「気の毒」かられていると誤解してしまっただけではないだろうか。

以上のようにまとめると、ミスラ君はインド人魔術師としての誇りを持った、内向的な人物といえることが分かる。ただそれは性格の問題ではなく、自身の世界を強固に保護しようとするがゆえのことで、部外者の安易な干渉は許さないため、他に対する攻撃性をはらんでいる。そうした自らの魔術に対する姿勢が、「私」になされた仕打ちとして、物語には記されているのである。

注1 「宇宙の妖術から室内の魔術へ―『ハツサン・カンの妖術』か

らみた『魔術』―」（『弘学大国文』17 一九九一年九月）

2 張宜樺「芥川龍之介『魔術』論―物語の構成をめぐる」（『芸文研究』85 二〇〇三年二月）

3 「芥川龍之介〈御伽噺〉の世界で」（『鴎外と漱石 明治のエトス』一九八三年五月 力富書房）

4 「芥川童話の展開をめぐる」（『愛媛国文と教育』二十一 一九八九年二月）

5 松村明編『大辞林第三版』（一九九五年一月 三省堂）

6 中渕正晃他編 二〇〇二年二月 改訂八版 東京書籍

テキストは岩波書店版『芥川龍之介全集』（一九九六年）に拠った。  
（やまわき かな／平成一七年度博士前期課程修了）